

岩倉使節団（1871年－1873年）の見た東アジア

齊 藤 恵 子

岩倉使節団とは、岩倉具視を明治天皇の名代、特命全権大使として、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文という明治新政府の主要メンバーを副使として、1871年から1873年まで、一年十ヶ月にわたって米欧の主要国十二カ国を視察して帰国した明治政府の使節団である。まわった国々は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、オランダ、イタリア、ロシア、デンマーク、スウェーデン、オーストリア、スイスの十二カ国で、訪ねた都市は百二十であった。帰路に東南アジア、南アジア、東アジアを回覧した。一行は約五十人の政府関係者と同行した留学生（女子留学生五名を含む）をあわせると百人を超える大集団であった。

使節団は、出発前から、国民に対して詳細な報告書を作ることを予定しており、佐賀藩出身の漢学者久米邦武（1839－1931）を直属の書記官として同行させた。久米は使節団の眼となり耳となって終始一行と行動を共にした。その報告書は、帰国後、『特命全権大使米欧回覧実記』（全五巻）の大著となって1878年に刊行された。久米は、自然科学的な実証精神をもった儒学者であり、歴史家であった。豊富な漢学の素養を十分に生かして、冷静で私情をまじえず客観的な報告記を完成し、よく使命を果たした。安易な解答を与えず、読者に考えさせる方法も評価できる。

明治維新とは、1868年におこった一種の政治革命であった。三百年近く続いた徳川幕府制を廃止して、明治天皇の王政復古宣言に続いて、明治新政府を成立させ、日本は近代的な国民国家へと歩みだした。十九世紀アジアにおける最大の近代化革命であった。中国は清朝、朝鮮は李朝の時代である。

使節団が出発した1871年という年は、まだ日本国内が流動的であった時期である。国内政治がどう動くかわからず、国の財政基盤も危ういものであった。中央集権国家をつくるため廃藩置県という、日本国内の行政組織の大変革が断行されたばかりのときである。

いくら新国家の青写真、設計図が必要な時期とはいえ、新政府の最も優秀な人材が二年近くもごっそりと国を留守にすることは、容易なことではない。東アジアにおいて、このようなことを試みた国は日本以外にない。西洋文明の衝撃を受けて、何とか、西洋の支配下につかず、独立国家として、西洋に対抗していかなければならないという、新政府の強烈な使命感と責任感がなければこのような使節団の派遣は到底不可能なことであった。

この使節団の使命は三つあった。第一に、明治新政府として旧幕府時代の条約締結国の元首に対する挨拶まわり、外交上の儀礼を果たすためである。

第二に幕末に日本が結んだ「不平等条約」の改正への予備交渉のためである。幕末の条約

には、外国人には治外法権が認められ、日本には関税自主権が認められていないという不公平なものであった。この条約の改正は、その後四十年にわたって、明治政府の悲願となったのだが、このときにはちょうど翌年の1872年が改正期限なのであった。日本はまだ国力が不足しており、時期が早すぎたので、もう少し改正を延期すべく、関係諸国の意向を打診するために予備交渉が必要であった。これには使節団は失敗した。

三つめは、政府の首脳が欧米の文明を直接見聞して、その後の日本の国作り、国政の方針を立てるのに役立てるためである。異文化異文明の総合研究とでもいうべきもので、この第三の使命こそが最大で最重要の課題であった。

一行は1871年11月蒸気船アメリカ号でアメリカへ向け横浜港から出発した。すべて船と鉄道の旅であった。この交通手段と、アメリカの西の果てサンフランシスコから、鉄道で、東海岸へわたり、船でイギリスのロンドンに向かうというルートのとおり方が、一行の視察にとってよかった。時間の経過につれて、だんだんと異文化異文明に慣れてくるのである。

当時のアメリカは南北戦争が終わって間もなく、まだ後進国であった。自由とデモクラシーとプロテスタンティズムの熱烈な信仰、アメリカ文明を支える原動力にふれた。アメリカの憲法が、自由、民主の精神をうたい、1776年の合衆国成立以来百年のあいだに、いかにアメリカ国民の中に浸透しているかを実感した。だが自由・平等・民主主義をうたう憲法の裏に、黒人奴隷制度もあり、人種差別もあることをみた。

当時のイギリスは、世界文明の頂点に立っていた。世界最大の植民地をもち、七つの海と世界人口の四分の一を支配していた大英帝国はその絶頂期にあった。

高い工業技術を誇るイギリスで、工場、造船所、製鉄所などを精力的に見学した。と同時に繁栄の背後で疎外されて貧困にあえぐ民衆が多いことも、イギリスが階級社会であり、産業革命以後、貧富の格差が拡大していることも観察している。

イギリスの国力に感嘆すると同時に、あまりに大きい日本との格差を前にして、使節団は焦燥や不安も感じたが、日本とヨーロッパ（イギリス）との文明の時間差は、およそ四十年から五十年と判断し、一世代あまりならば日本としては追いつけるという自信ももった。

ロンドンからドーヴァー海峡を渡って、パリに入った。ヨーロッパの風雅の中心であるパリという都会のもつ美しさ、そこにある喜びというものを一行はまず感じた。もちろん、この文明の背後にある、工業、軍事、教育の組織にも注目して観察、研究を続けた。

新興ドイツの首都ベルリンに来て、文明の頂点から少し下がったこの国に、一行はようやくある親近感を覚え、日本との類似点もつかんだ。結局、近代日本の基本法である明治憲法の立案者には伊藤博文がなり、日本はイギリスではなくドイツを模範とした近代化路線をとることになったのである。

ベルリンからポーランドの平原を走り抜け、一行はロシアのサンクトペテルブルグにやってきた。これまで日本はロシアを恐れていたが、この地に来てロシアが未開の域にとどまっていることを知った。使節団の目にはロシアは、むしろ後進国とうつつた。

その後、ヨーロッパの小国をまわって、国境画定の大切さ、小国であっても大国に屈することのない自主独立の精神、教育の充実などを学んだ。

帰路は五十日かかっていた船旅で、使節団一行はただ通過しただけでなく、港に寄って多くのものを見聞した。マルセイユからナポリ、アレキサンドリア、スエズ運河を経て、アデン、ボンベイ、ガル、カルカッタ、マラッカ海峡を経て、セイロン島、シンガポール、サイゴン、香港、広東、上海から長崎へと帰ってきた。十九世紀の後半、ヨーロッパ各国の東南アジア侵略の時代で、そこにおける弱肉強食の国際政治の現実、植民地支配の激しい争いを、一行はつぶさにみている。

岩倉使節団の報告書は、『米欧回覧実記』の名のとおり、アメリカとヨーロッパの国々の見聞が主体となっただけで、帰路の中東とアジアの植民地の地域の回覧の記録も、見過すことのできない重要な意味をもっている。その後百三十年にわたる日本の近代化の経過をふりかえり、今後、日本がアジアの一員として、世界においてどのような役割を果たしてゆけばよいかを考える際に、多くの示唆を与えてくれるものである。

一行は、オランダ人、スペイン人、ポルトガル人の植民地に対するあくどいやり方を批判し、イギリスの柔軟な、巧妙なやり方をほめているが、一方でアヘン貿易にみるようにイギリスの老獪で悪辣な面もきちんとみている。

「カルカッタからの輸出品のトップはアヘンですべて中国に輸出されている。中国は全土の民が一年中の労力を傾けてひたすらアヘンを手に入れ、精神をマヒさせることに精を出している……英国もまたこの非道徳利益によって太っている。これが文明の正しいあり方といえるだろうか」

また、植民地にいる、また、植民地にむかうヨーロッパ人の態度も言葉も、本国にいる時とはまったく違う。東南アジアの人々を軽蔑して、傲慢、無礼である。しかしながら、これは彼らが本国から棄てられた民であるからで、この態度をもって、ヨーロッパ文明の本質を判断しては誤りであると言っている。

しかし、岩倉使節団と同行し、アメリカからフランスに渡り、一行より九ヶ月遅れて帰国した留学生の一人、中江兆民も同じような情景を目にしたが、使節団とは違って、これこそ文明のもうひとつの顔だとみた。植民地におけるヨーロッパ人を本国の文明から切り離す考えをすてて、自ら文明人と言いながらこのような言動をするヨーロッパ文明へ兆民は疑問を呈したのである。兆民の考えの根底にはトルコやインドなど東南アジアの民も同じ人間であるというヒューマニズムがある。『回覧実記』が出版されたのは1879年、兆民がこの批判を発表したのは1883年だという時間の差を考えに入れたいといけないうだろう。

しかし、平民主義に立ち、フランスの民主主義を紹介し自由平等博愛の理想を実現させようと、一生著作や教育を通じて孤独な戦いを続けた中江兆民だからこそ、このような見方をすることができたのである。

近代国家の在り方のモデルを求めて米欧を回覧し、その成果すべてを日本の歴史の進展の

うちに実現してきたわけではないが、その後の日本の針路に大きな影響を及ぼした岩倉使節団の見解と兆民のそれは一致するはずのないものであった。

東南アジアでもうひとつ明瞭なのは、熱帯の人々は怠惰であるという、一行の抜きがたい意識である。東南アジアは文明とはまったく無縁な地帯で人々は進歩のない民族、人種である。風土が肥沃かやせているか、人口の多少も問題ではない。国民が怠惰か勤勉かによって高い文明に達することができるか決まるという考えである。

久米邦武は、東南アジア、南アジアと東アジアを区別しており、東アジアと言う時に、日本と中国とを考えていたようである。東アジアとして、香港と広東、上海とについて記述している。

イギリスの植民地であった香港でも広東でも、貿易でいかに外国人が利権をほしいままにしているか。イギリス人から圧迫されていることにより、中国人自身が自分を虐げているのではないか。上海でも自国民に対する中国の政策は、外国人が貿易を独占する道を作っているようなものだという。香港の中国人市街が清潔であったとしてもそれはイギリス人が石造りの家をその地方の住民に貸しているからである。これら海港都市では繁栄している外国人居留地と貧しい不潔な現地人の区域とを対照している。

上海の港には、商船のマストが林立しており、いかにも繁栄しているようにみえるが、中国人の市街は小路が非常に狭く店には雑多なものが並び、下水道の設備はなく、不潔で臭い。中国人はこうした状態に関心である。上海では造船所の建造技術を学んだこと、福建で兵器庫と造船所をヨーロッパから学んだことを評価しているだけだ。

残念なことに久米邦武は実際に香港、広東、上海の諸都市の実態を目の前にして、中国についての尊敬をいささか失ってしまったようである。一つには、中国人がアヘンにむしばまれている現実には衝撃を受けたのであろうし、実見した中国の街の不潔さを、欧米の都市と比較し、またそれに対する中国国民の鈍感さに幻滅を味わったこともあるだろう。いずれにしても、漢籍を通して知ってきた五千年の歴史をもつ中国と現実の中国の姿との隔たりの大きさに大きな戸惑いを感じたことは間違いない。

さて二十一世紀は先行きの見えない不透明な時代である。あれから百三十五年。世界はいろいろな面で大きく変化した。二十一世紀の世界はどうなっていくか、誰も先が読めない。しかし国際的な相互依存がますます強くなっていく世界で日本がどのような基本方針をもって生きていくか。明治初期のように、文明の進んだ国々に模範を求めることはもはやできない。学ぶべきは、自分の国の歴史である。自分たちの選択は間違っていなかったか。「大国」に模範を求めるより、「小国」に学ぶ道もあったのではないか。中江兆民の主張した自由、民主、平等の精神は、日本に根付いたのかどうか。今日の私達にとって南アジア、東南アジア、そして東アジアの国々のその後の歴史を良く学び、日本の学ぶべきこと、反省すべきことをきちんと自覚することが何よりも大切なことである。